

研究タイトル:

# 近世における平安文学の受容

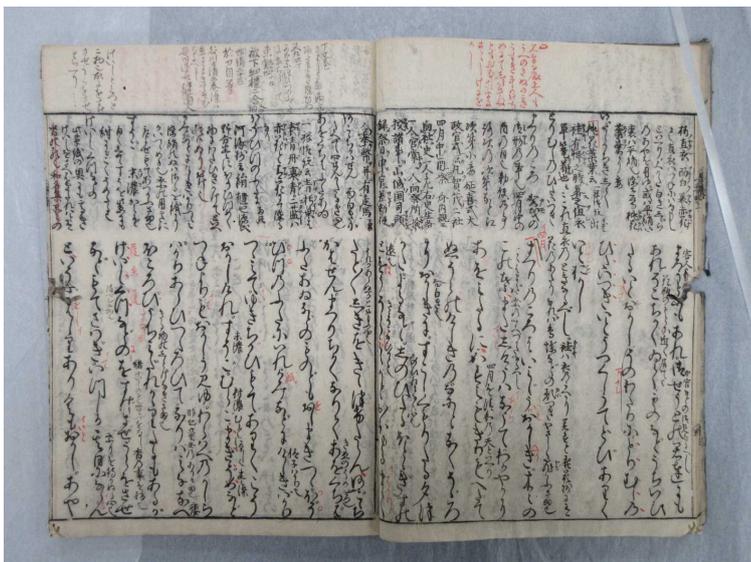


氏名:	渡邊美希 / WATANABE Miki	E-mail:	watamiki@ichinoseki.ac.jp
職名:	助教	学位:	博士(文学)
所属学会・協会:	中古文学会、全国大学国語国文学会、文芸研究会、鈴屋学会		
キーワード:	『枕草子』、注釈、近世、和学、平安文学		
技術相談 提供可能技術:	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書誌調査</li> <li>・翻刻</li> <li>・古文読解</li> </ul>		

## 研究内容: 近世後期『枕草子』注釈の研究

私は、近世において平安文学がどのように読まれていたのかを広く研究しています。特に、『枕草子』について、注釈がどのように展開していったのかを調査しています。

『源氏物語』や『枕草子』はどちらも西暦 1000 年頃、非常に近い時期に成立したと言われています。しかし、その研究の歴史を見るとその様相は大きく異なります。『源氏物語』は 1100 年代中頃から歌学の規範となり、注釈書が編まれるようになりますが、『枕草子』の注釈活動が本格化するのには近世に入ってからです。『枕草子』の注釈活動は、延宝二年(1674)に加藤磐斎『清少納言枕草紙抄』(以下『磐斎抄』)、北村季吟『枕草子春曙抄』(以下『春曙抄』)が相次いで刊行され、少し遅れて元和元年に岡西惟中によって『清少納言旁註』(以下『旁註』)が刊行されたことに端を発すると言われています。なかでも『春曙抄』は、『枕草子』の流布本として近代以降まで長く参照されていました。しかし、『枕草子』全体に注を付した新たな注釈書が刊行されなかったこともあり、近世中期以降『枕草子』の研究活動は停滞していたと言われることもあります。ですが、写本の形で残されているものや、『春曙抄』への書入れにまで視野を広げて見ると、近世中期以降もさまざまに『枕草子』が研究されてきたことが見えてきます。私は写本や書入本『春曙抄』に注目し、全国の図書館に赴いて資料を一点ずつ調査することで、どのような地域で、どのような人々が『枕草子』のどこに注目し、研究していたのかを明らかにしています。具体的な注釈書の研究を蓄積することを通して、『枕草子』がどのように「古典」になったのか、そして現代における「古典」とは何かを究明しています。



提供可能な設備・機器:

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	